

那珂 29

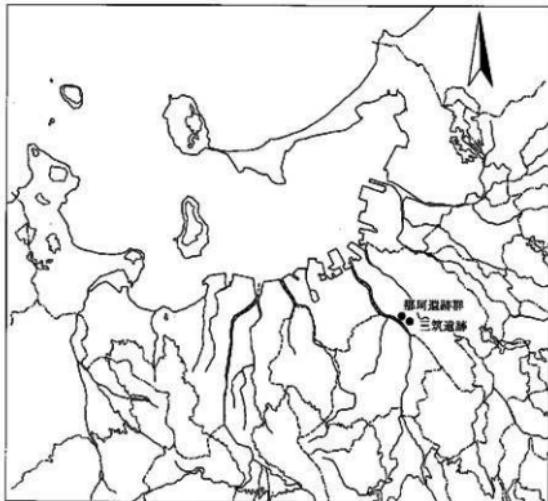
—那珂遺跡群第72次調査・三筑遺跡第4次調査報告—

2001

福岡市教育委員会

那珂 29

—那珂遺跡群第72次調査・三筑遺跡第4次調査報告—



那珂72次

遺跡略号 NAK-72

遺跡調査番号 9935

三筑第4次

遺跡略号 SCC-4

遺跡調査番号 9944

2001

福岡市教育委員会

序 文

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前発掘調査を実施し、記録の保存に努めているところであります。

本報告による那珂遺跡群では占墳時代～古代の、三筑遺跡では占墳時代の遺構と遺物を多く確認することができ、当時の集落を知る上で貴重な成果を得ることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心からの謝意を表します。

平成13年3月30日

福岡市教育委員会
教育長 生田 征生

例 言

1. 本書は平成11年度(1999年度)に福岡市教育委員会が実施した那珂遺跡群第72次調査・三筑遺跡第4次調査の発掘調査報告書である。各調査地点の所在地は下表によられたい。
2. 遺構の実測は那珂72次調査を阿部泰之、三筑4次調査を榎本義嗣・阿部が行った。
3. 遺物の実測は那珂72次調査を阿部・藤祥子、三筑4次調査を阿部が行った。
4. 製図は那珂72次調査・三筑4次調査とも阿部が行った。
5. 写真撮影は那珂72次調査・三筑4次調査とも阿部が行った。
6. 遺構番号は那珂72次が遺構の性格ごと・三筑4次調査が全遺構の通し番号とし、遺構の性格を略号で頭に付して呼称している。遺構番号は獨立柱建物 (SB)・竪穴住居跡 (SC)・土坑 (SK)・溝 (SD)・ピット (SP) である。
7. 遺物番号は各調査ごとに通し番号とした。なお挿図中の遺物番号と写真中の遺物番号は一致する。
8. 本書で用いる方位は磁北であり、真北から $6^{\circ} 21'$ 西偏する。
9. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので活用されたい。
10. 本文中で使用した貿易陶磁の分類はすべて「博多出土貿易陶磁分類表」(『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ博多(1)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集別冊1984)に掲っている。
11. 本書の執筆・編集は阿部が行った。

那珂遺跡群第72次調査

遺跡調査番号	9935	遺跡略号	NAK-72
調査地地籍	博多区那珂6丁目11-153・154	分布地図番号	24-0085
開発面積	274,07m ²	調査対象面積	190,0m ²
調査期間	平成11年9月3日～平成11年10月6日	事前調査番号	11-2-48

三筑遺跡第4次調査

遺跡調査番号	9944	遺跡略号	SCC-4
調査地地籍	博多区三筑2丁目19-5	分布地図番号	25-0104
開発面積	344m ²	調査対象面積	275,72m ²
調査期間	平成11年10月13日～平成11年10月26日	事前調査番号	11-2-219

那珂遺跡群第72次調査報告

本文目次

I はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査体制	1
II 調査の記録	5
1. 調査概要	5
2. 遺構と遺物	5
竪穴住居	5
井戸	17
掘立柱建物	17
III 小結	17

挿図目次

第1図 調査地点位置図(1/50,000)	2
第2図 調査地点位置図(1/25,000)	3
第3図 調査区位置図(1/2,500)	4
第4図 調査区土層断面図(1/80)	6
第5図 調査区全体図(1/80)	6
第6図 SC01実測図(1/60)	7
第7図 SC01竪穴実測図(1/30)	7
第8図 SC01出土須恵器火葬団(1/3)	8
第9図 SC01出土土師器実測図(1/3)	9
第10図 SC01出土陶磁器実測図(1/3)	9
第11図 SC01出土鉄滓実測図(1/3)	9
第12図 SC01出土土・石製品実測図(1/3)	9
第13図 SC02実測図(1/60)	10
第14図 SC02竪穴実測図(1/30)	10
第15図 SC02出土遺物実測図(1/3)	11
第16図 SC03実測図(1/60)	12
第17図 SC04実測図(1/60)	13
第18図 SC04出土遺物実測図(1/3)	13
第19図 SE01実測図(1/60)	14
第20図 SE01出土遺物実測図(1/1・1/3)	14
第21図 SB01実測図(1/60)	15
第22図 SB01出土須恵器実測図(1/3)	15
第23図 SB02・出土須恵器実測図(1/40・1/3)	16

写 真 目 次

写真 1	調査区西半全景（東から）	19	写真 8	SC02南側遺物出土状況（北から）	23
写真 2	調査区東半全景（西から）	20	写真 9	SC03（東から）	24
写真 3	SC01（南から）	21	写真 10	SC04（南から）	24
写真 4	SC01竪（南から）	21	写真 11	SE01（南から）	25
写真 5	SC02（東から）	22	写真 12	SB01西側柱穴列（南から）	25
写真 6	SC02竪（東から）	22	写真 13	出土遺物	26
写真 7	SC02西側遺物出土状況（東から）	23			

三筑遺跡第4次調査

本 文 目 次

I はじめに

1.	調査に至る経過	27
2.	調査体制	27

II 位置と環境

III 調査の記録

1.	調査概要	30
2.	遺構と遺物	31
	土坑	31
	溝	33

IV 小結

..... 33

挿 図 目 次

第 1 図	調査区位置図(1/2,500)	28
第 2 図	調査区全体図(1/100)	30
第 3 図	SK06・09・11実測図(1/40)	31
第 4 図	SK06出土横瓶実測図 (1/4)	32
第 5 図	SK23・30・38・40・41実測図(1/40)	32
第 6 図	SD43・46実測図(1/40)	33

写 真 目 次

写真 1	SK06出土横瓶	31	写真 7	SK38（西から）	37
写真 2	調査区全景（東から）	35	写真 8	SK40（西から）	37
写真 3	SK06遺物出土状況（南から）	36	写真 9	SK41土層断面（西から）	37
写真 4	SK06完掘状況（南から）	36	写真 10	SK41完掘状況（西から）	37
写真 5	SK07（東から）	36	写真 11	SD43（南から）	38
写真 6	SK30（西から）	36	写真 12	SD46（南から）	38

那珂遺跡群 第72次調査報告

I はじめに

1. 調査に至る経過

平成11年4月21日付で、谷義敬氏より本市教育委員会宛に博多区那珂6丁目11-153・154(面積: 274.07m²)における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査願が提出された。(事前審査番号: 11-2-48)。これを受けて教育委員会埋蔵文化財課では申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群に含まれていることから事前調査が必要であると判断し、同年5月31日に試掘調査を行った。その結果、良好な遺構が検出され、この試掘調査結果をもとに両者で協議を行ったところ、基礎及び駐車場部分の地下げにより遺構の破壊を免れないため、住宅部分を対象に本調査を実施することとした。その後、委託契約を締結し、同年9月3日より発掘調査を行うこととした。

なお、発掘調査において谷義敬様をはじめ関係者のみなさまには多人なご協力とご理解をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

2. 調査体制

事業主体 谷義敬

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査總括 埋蔵文化財課長 山崎純男 同課調査第2係長 力武卓治

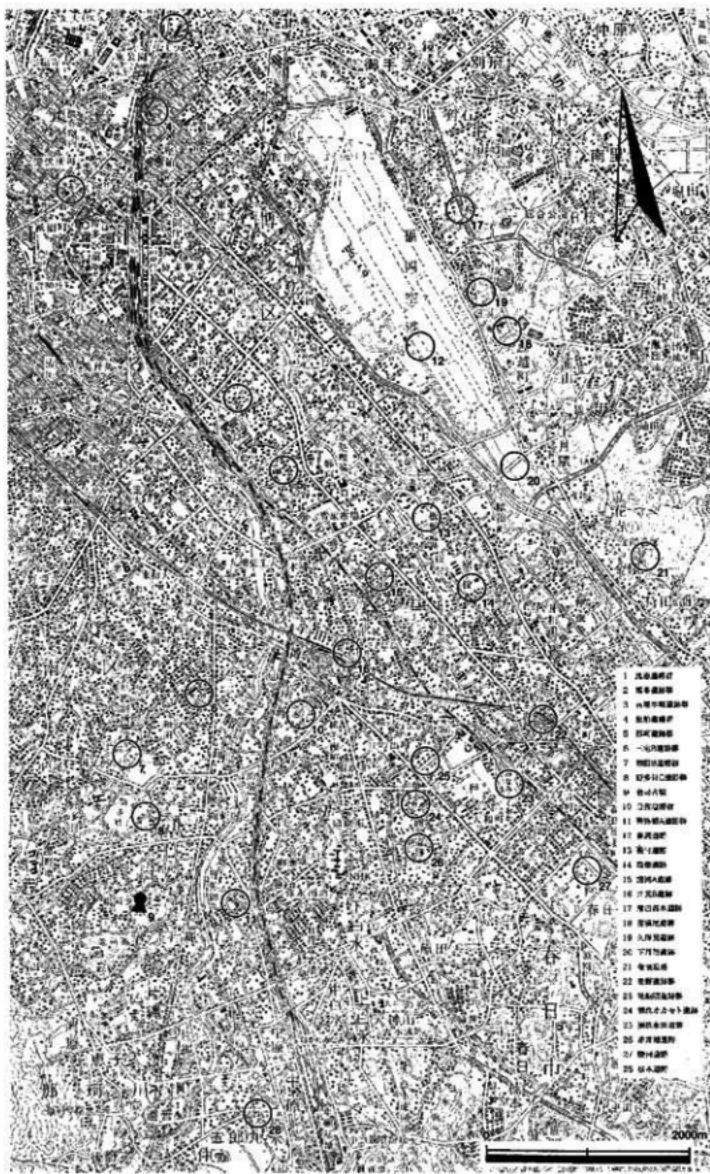
調査庶務 文化財整備課 谷口真由美(前任) 御手洗清(現任)

事前審査 埋蔵文化財課事前審査係長 田中壽夫 同課事前審査係文化財主事 加藤隆也

調査担当 同課調査第2係 長家伸 同課調査第1係 阿部泰之

整理作業 穂田慧 黒早苗

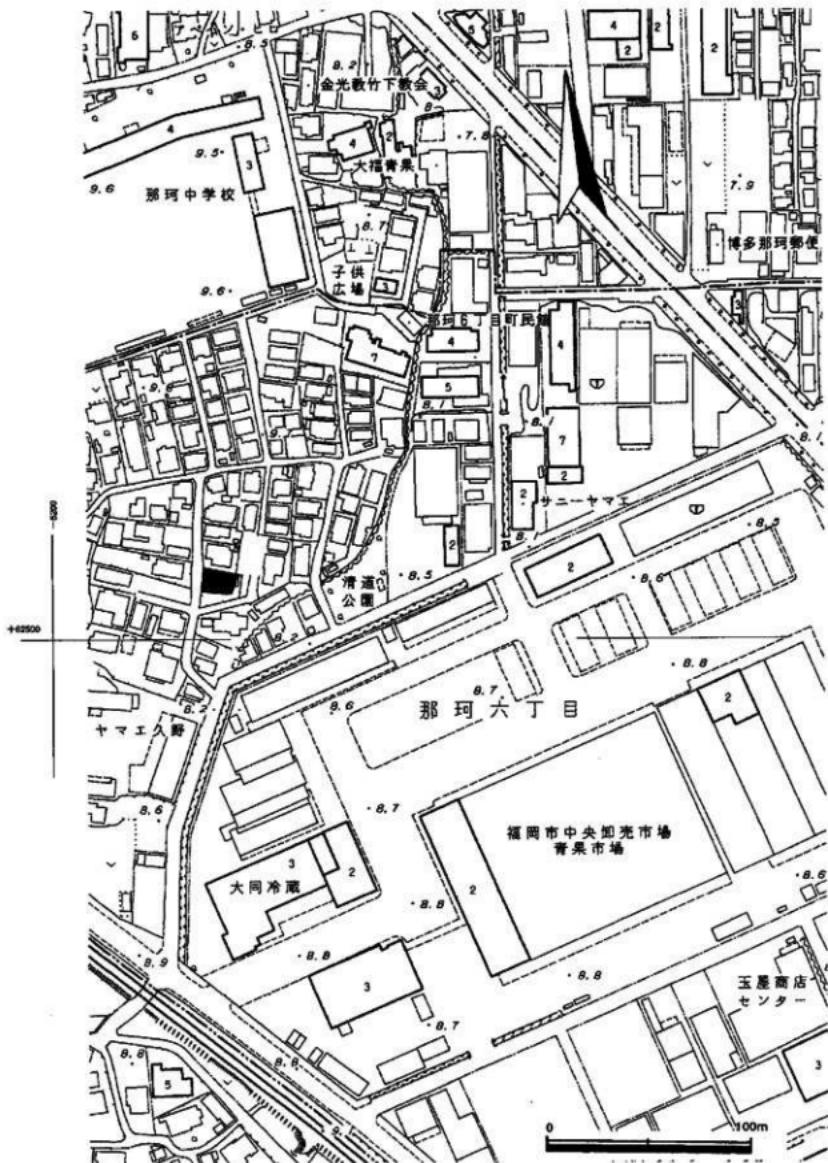
調査作業 有田恵子 石川洋子 泉本タミ子 占賀典子 田中トミ子 鍋山治子 福場真由美 北条
こず枝 持丸玲子 森田祐子



第1図 調査地点位置図 (1/50,000)



第2図 調査地点位置図 (1/25,000)



第3図 調査区位置図 (1/2,500)

II 調査の記録

1. 調査概要

本調査地は春日丘陵より高度を漸減させながら北西へ連続する洪積丘陵上に立地する那珂遺跡群の南端部に位置する。遺構は標高約10mの現地表面よりマイナス1m、暗褐色を呈する鳥栖ローム上にて検出される。調査地は1994年度に実施された古代の井戸1基・中世前半期の掘立柱建物1棟・溝状遺構6条などを検出した48次調査区の西約100mの地点に位置する。試掘調査において古墳時代後期の竪穴住居等が検出されているが、その地点は現状保存され本調査は行われていない。

今回検出した遺構は古墳時代中期の竪穴住居1軒・後期(TK209並行期)の竪穴住居2軒・掘立柱建物1棟・古代の掘立柱建物1棟・時期不明の井戸(土坑)1基・柱穴多数で、遺構は調査区全体に分布する。遺構面は南に緩く傾斜し、調査区の南は急激に標高を下げる洪積台地の南端である。出土した遺物はコンテナ3箱分である。主体は古墳時代後期に位置づけられるもので全体のほぼ9割を占める。弥生時代に位置づけられる遺物は竪穴住居・柱穴の埋土に混入する形で出土するが、小片が多く著しく摩滅している。黒曜石などの石器・石製品類もほとんど出土していない。

2. 遺構と遺物

竪穴住居(SC)

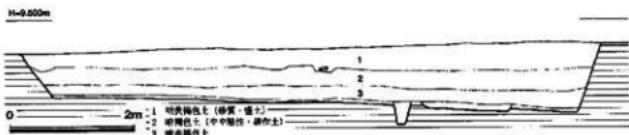
4軒検出している。古墳時代中～後期に位置づけられるもので調査区東半に密集しているが、切り合はないく方位をそろえた形跡も伺えない。全て方形住居で竪を確認できたのが2軒・調査区外となり完全に検出しえなかつたものが2軒ある。

SC01(第6図・第7図)

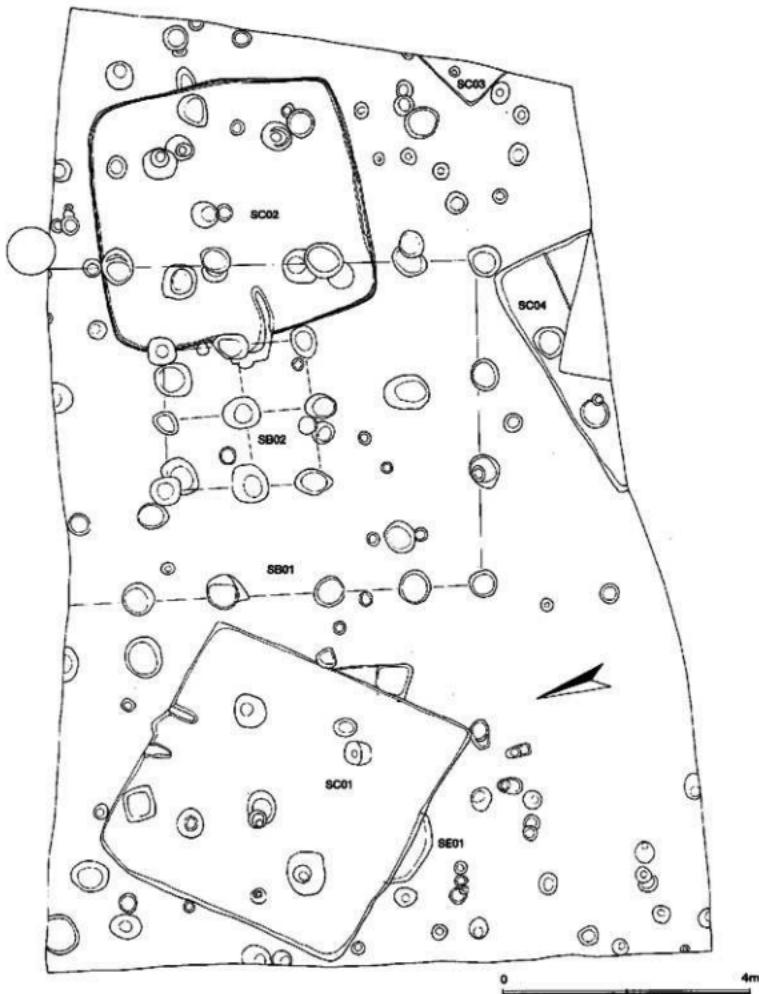
調査区東側にて検出した。床面から主柱穴以外にも柱穴を検出したが主柱穴以外からは中世前期に属する土器・陶磁器が出土し中世のものと思われる。埋土に竪穴住居のものと同様であったため上面での検出ができなかつた。平面形は1辺4.5mを測り東西壁が若干南北にずれる菱形状を呈する。主軸をN-35°-Eにとる。壁は20cm前後残存し、壁溝は検出できなかつた。主柱は4本柱と考えられ、柱間は東西2m・南北2.2mを測る。床面には6～10cmの厚さで鳥栖ロームを用いて貼床が施される。多少の凹凸はあるが全体に均一に貼られている。床面の硬化は認められなかつた。北壁の中央部には竪が設けられる(第7図)。竪は八女粘土を用いて貼床底面から構築され、床面から9cm前後の高さで残存している。中央・焼成面の壁面には幅42cm・奥行き最大15cmの突出部が設けられ、煙道と思われる。中央部には焼土の混入した壁体と思われる八女粘土が堆積している。底面に支脚・くぼみは検出できなかつた。また東側には八女粘土塊が貼床直上より検出されている。焼土は認められず壁体の補修に用いたものとも考えられる。

出土遺物(第8～12図)須恵器杯身・杯蓋・高杯・長頸壺・壺・土師器壺・杯・高杯、他に混入として弥生土器甕が出土している。

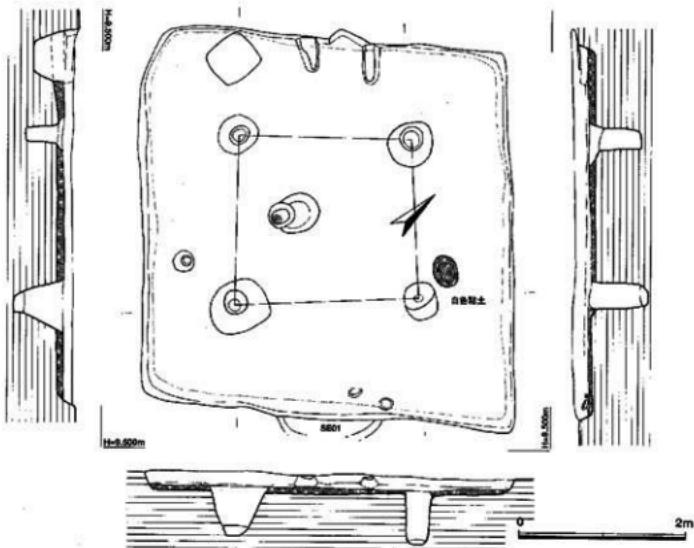
須恵器(1～21) 1から13は杯である。1は蓋で口縁部の小片である。胎土は精良堅密で焼成は良好である。体部側が岩干内溝し口縁部にやや鋭い稜を作り出す。内・外面とも回転ナデ調整を施す。2は蓋で口縁部の小片である。胎土は精良堅密で焼成は良好である。口縁部が外反し内面に段を



第4図 調査区土層断面図 (1/80)



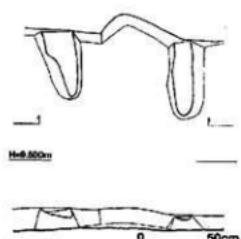
第5図 調査区全体図 (1/80)



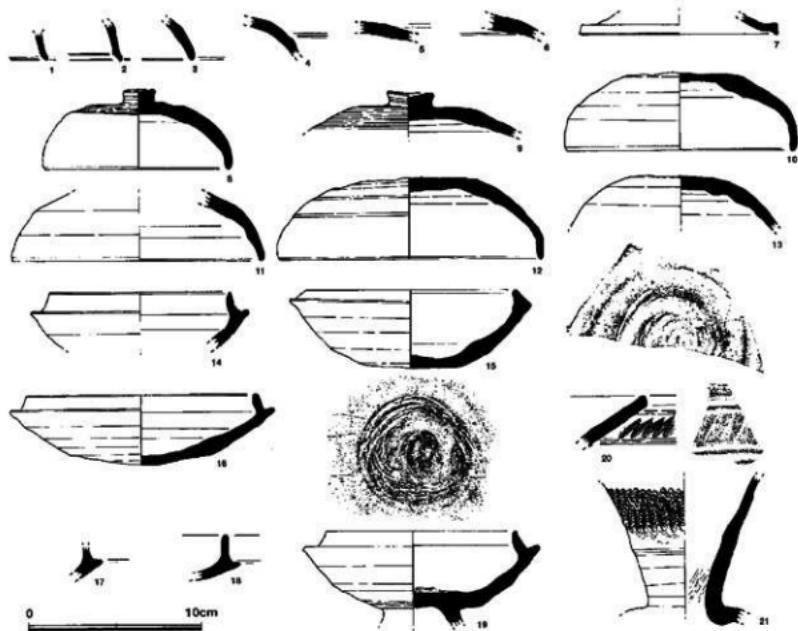
第6図 SC01実測図 (1/60)

持つ。内・外面とも回転ナデ調整を施す。3は蓋で口縁部から体部にかけての小片である。胎上は精良堅緻で焼成は良好である。口縁は丸く收め体部の後は不明瞭である。内・外面とも回転ナデ調整を施す。4は蓋で体部の小片である。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。外面に凹線を施す。内面は回転ナデ調整・外面は円線より上部が左回りの回転ヘラ削り・下部が回転ナデ調整を施す。5は体部の小片である。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。内面にヘラ記号をもつ。内面は回転ナデ調整・外面は左回りの回転ヘラ削りを施す。6は体部の小片である。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。外面にヘラ削りによる段がつく。内面は回転ナデ調整・外面は左回りの回転ヘラ削りを施す。7は高壇の脚部である。複元底径11.4cmを測る。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。内・外面ともに回転ナデ調整を施す。8は蓋である。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。天井部に細かく明瞭な回転ヘラ削りを施す。同じく上面に直径1.8cm・高さ0.9cmのつまみがつく。つまみの側面には回転ナ

デ調整が施される。口縁部は丸く收める。外底面・内面は回転ナデ調整が施される。9は蓋である。天井部には3.9cm・高さ1.2cmのつまみがつく。つまみ及びその周辺以外の外面には左回りの回転ヘラ削りが施される。その他の外面及び内面は回転ナデ調整である。10は蓋である。口径は13.0cm、器高は4.6cmである。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。口縁部は丸く收め内面・外面下半には回転ナデ調整、外面上半には左回りの回転ヘラ削りを施す。11は蓋である。口径は復元で14.2cmを測り全体の1/6残存している。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。口縁部は丸く收め内面及び外底面には回転ナデ調整が施される。外面上半には左回りの回転ヘラ削りが施される。調

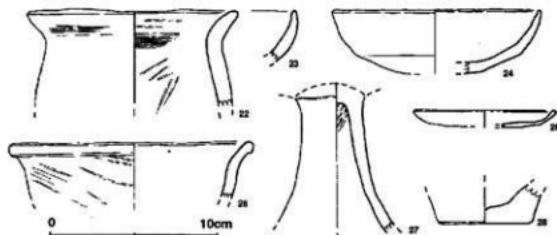


第7図 SC01実測図 (1/30)

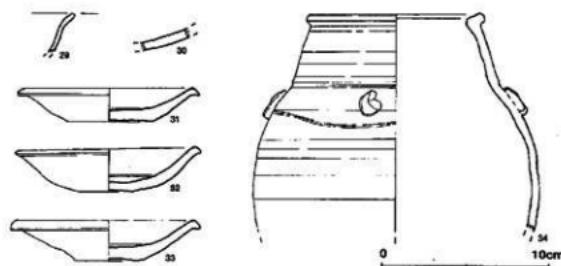


第8図 SC01出土須惠器実測図 (1/3)

整の境界部分にはごくわずかな縁を持つ。12は蓋である。壺の焼成部埋土中よりほぼ完形で出土した。口径15.0cm・器高4.75cmを測る。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。口縁部は丸く收め内面及び外面下半には回転ナデ調整・天井部には右回りの回転ヘラ削りが施される。内面上部には直交方向のナデが施される。13は蓋である。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。内面には回転ナデ調整・外面には左回りの回転ヘラ削りが施される。底部内面には同心円状の當て具痕が残存する。14は身である。口径は復元で10.4cmを測る。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。かえりはやや内傾し内・外面とも回転ナデ調整を施す。外底面は左回りの回転ヘラ削りを施す。15は身である。16とともに床面直上にてほぼ完形で出土した。口径は12.0cm・器高は4.5cmを測る。胎土は精良であるが焼成は水洗時に胎土が溶出するほど不良であり著しく磨滅している。内・外面とも灰白色を呈しかえりは低く内傾する。内面及びかえり部は回転ナデ調整・外底面は左回りの回転ヘラ削りを施す。16は身である。口径は13.1cm・器高は4.0cmを測る。胎土は精良であるが15同様焼成は不良であり著しく磨滅している。内・外面とも灰白色を呈しかえりは低く内傾する。内面及びかえり部は回転ナデ調整・外底面は右回りの回転ヘラ削りを施す。15・16の2点は一括出土である。17は身口縁部の小片である。胎土は精良堅緻であり焼成は良好である。かえりはほぼ垂直に立ち上がる。内・外面ともに回転ナデ調整を施す。18は身口縁部の小片である。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。かえりは垂直に高く立ち上がり受け部にV字状の工具で段を作り出している。全体に器壁は薄く内・外面ともに回転ナデ調整を施す。19は高环の身部である。脚部の大半を欠損する。口径は10.9cmを測



第9図 SC01出土土器実測図 (1/3)

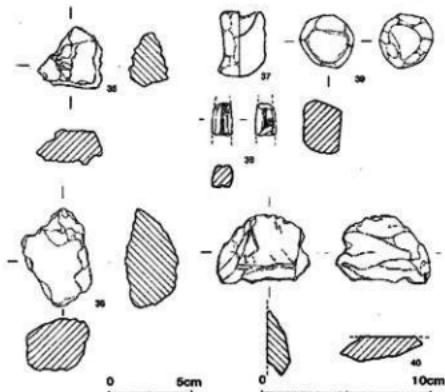


第10図 SC01出土陶磁器実測図 (1/3)

状文を施すが下端はナデ消している。外面と内面は回転ナデ調整である。

土器 (22~25)

22は甕である。口径は12.1cmを測る。胎土は精良で焼成は良好である。頸部内・外面はヨコハケ、内面は斜め方向のヘラ削りを行う。外面は著しい磨滅のため調整は不明瞭である。23は塊口縁部の小片である。胎土は精良で焼成は良好である。口縁部は丸く收める。内・外面ともナデ調整を施す。



第11図 SC01出土鉄滓
実測図 (1/3)

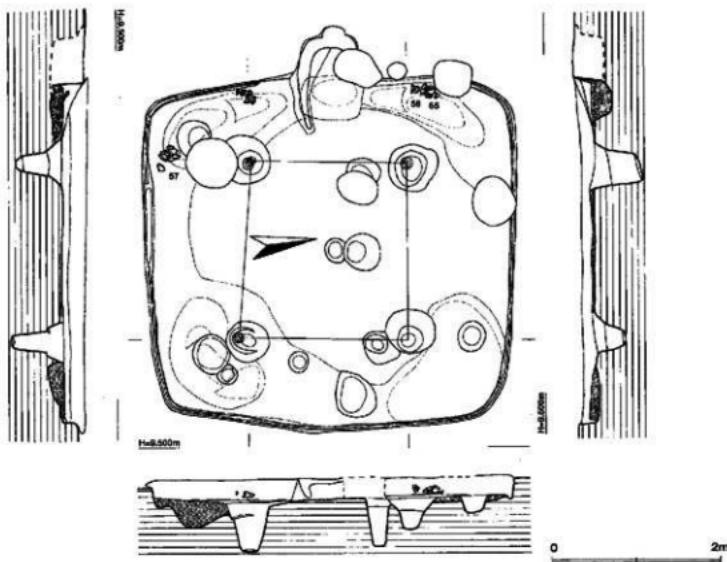
第12図 SC01出土土・
石製品実測図 (1/3)

り身部の約1/2が残存する。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。かえりは低く内傾し受け部にヘラ状工具でなでつけた凹線が入る。外側には脚部の接合痕が観察でき内面底部には同心円状の当て具痕が残る。内面及びかえり部は回転ナデ調整、外底面には左回りの回転ヘラ削りを施す。20は甕口縁部の小片である。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。全体にやや磨滅しているが波状文が観察できる。内・外面ともに回転ナデ調整を施す。21は長頸甕または瓶の頸部である。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。上半に波状文を施すが下端はナデ消している。外面と内面は回転ナデ調整である。

22は甕である。口径は復元で12.4cmを測る。胎土は精良で焼成は良好である。内面及び外面上半はナデ調整、外底面は粗いヘラ削りを施す。25は上部皿である。SC01を切る柱穴から出土した。口径は復元で6.3cm・署高は0.9cmを測る。胎土は精良で焼成は良好である。全体に磨滅が著しく外側調整は不明瞭であるが、外底面は回転系切りである。

弥生土器 (26~28)

26は甕である。口径は復元で13.8cmを測る。胎土は精良で焼成は良好である。口縁部は外反させ上下方向に肥厚する。外面は斜め方向のハケメが入る。内面はナデ調整である。27は高杯の脚部である。胎土

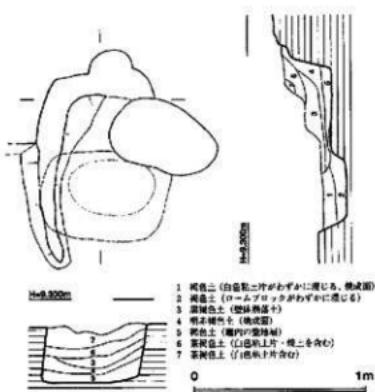


第13図 SC02実測図 (1/60)

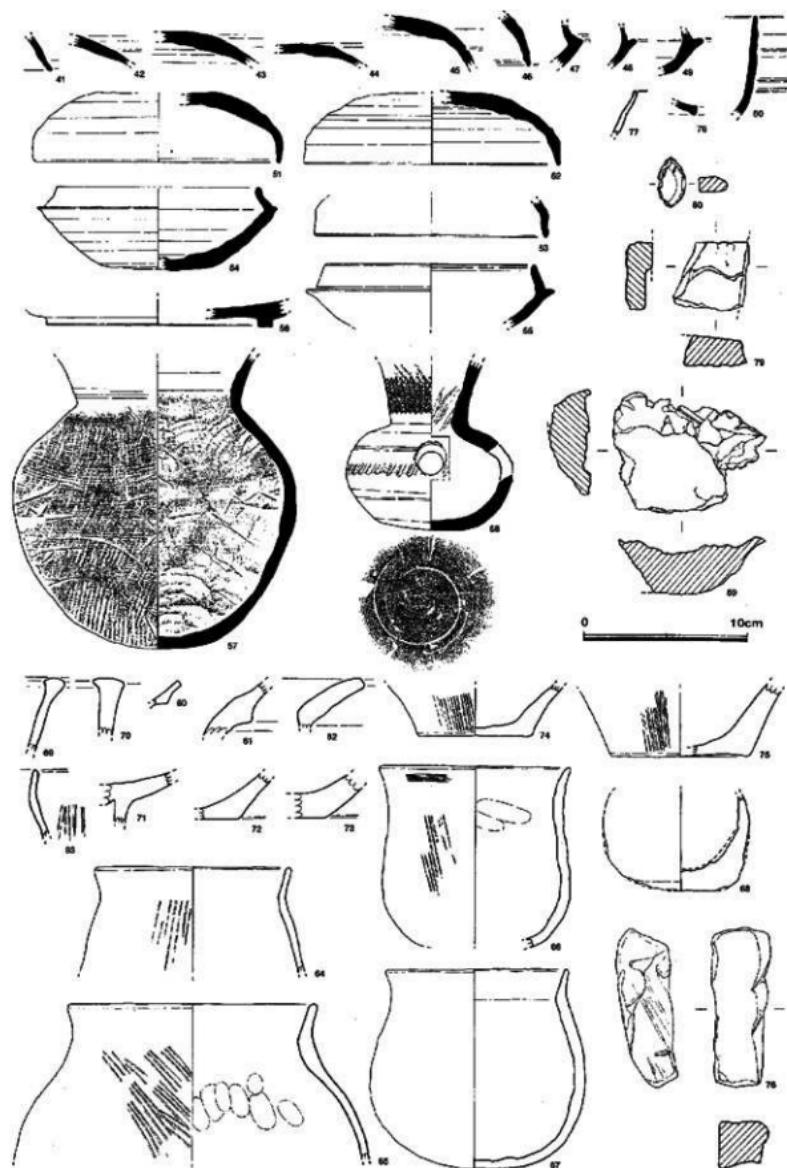
は精良で焼成は水洗時に胎土が溶出するほど不良である。内・外面とも著しく磨滅し調整は不明である。28は壺の底部である。底径は5.4cm・残存高は2.4cmを測る。胎土は精良で焼成は良好である。内・外面とも著しく磨滅し調整は不明である。

陶磁器 (29~34)

すべてSC01を切る柱穴からの出土である。住居埋土中からの出土もあるが上面で中世の遺構を検出できていないため混入してしまったものと思われる。29は白磁碗口縁部の小片である。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。器壁はほぼ一定の厚みを持ち外反する。口縁部は丸く收める。貫入はなく釉調は透明感のないオリーブ褐色を呈する。30は白磁の小片である。胎土は精良で焼成は良好である。全体に2次的な被熱による貫入を有し釉調は透明感なく白～淡褐色を呈する。31は白磁皿である。口径は9.8cm・器高は2.0cm・底径は5.0cmを測る。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。口縁部は外側に折り返すように強く外反させ内面に1カ所段を有する。内・外面とも全体に施釉され釉調は透明感のない灰白色を呈する。32は白磁皿である。口径は10.6cm・器高は2.4cm・底径は4.0cmを測る。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。口縁部は外側に



第14図 SC02壺実測図 (1/30)



第15図 SC02出土遺物実測図 (1/3)

折り返すように強く外反させ内面に1カ所段を有する。内・外面とも全体に施釉され釉調は透明感のない灰白色を呈する。33は白磁皿である。口径は11cm・器高は2.6cm・底径は3.2cmを測る。体部を全体に外側に張り出し口縁部は外側に折り返すように強く外反させ内面に1カ所段を有する。内・外面とも全体に施釉され釉調は透明感のない灰白色を呈する。31～33は博多分類V-2aにあたる。34は茶褐釉陶器四耳壺である。口径は10.0cm・胴部最大径は17.0cmを測る。胎土は暗灰色を呈し精良堅緻で焼成は良好である。頸部と胴部の境界に凹線を、耳の直下には沈線を蛇行させて施す。外面は回転ナデ調整・内面はナデ調整である。外面のみに施釉し口縁は露胎である。

鉄滓 (35・36)

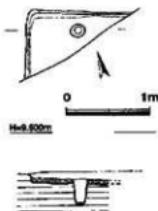
2点とも埋土中からの出土である。35は鍛冶滓である。内部に礫が癒着している。一部にメタル状を呈する部分がある。36は鍛冶滓である。幅1～2mm程度のスケールを含む。一部にメタル状を呈する部分がある。

その他の遺物 (37～40)

37は手捏ねのミニチュア土器である。口径2.1cm・器高3.9cmを測る。胎土は精良で焼成は良好である。内部は中実で全体に指オサエの痕跡が顕著である。凹部は指によって上方から成形されている。38は砂岩製石錐である。幅1.1cm・高さ1.2cmの断面略正方形を呈する。相対する2面に幅2～3mmの溝を研ぎだしている。39は不明土製品である。ここでは一応瓦玉の可能性を指摘しておきたい。最大径3.1cm・最大高2.2cmを測る。上下両面が黒色、その他の面が淡黄褐色を呈する。側面は磨滅が著しいが、打ち欠いた痕跡が観察できる。胎土は精良で焼成は良好である。40は泥質砂岩製砥石の小片である。研ぎ面は1面のみ残存する。

SC02 (第13図・第14図)

調査区東半にて検出した。西半をSB01・SB02に切られる。床面から主柱穴以外にも柱穴を検出したが主柱穴以外からは中世前期に属する土器・陶磁器が出土し中世のものと思われる。埋土が堅穴住居のものと同様であったため上面での検出ができなかった。平面形は南北3.8m(東壁)～4.2m(西壁)・東西3.6m～3.9mを測り西側の壁面が他の3面に比べ若干長い。主軸をN80°Wにとる。壁は12cm(北側)～24cm(西側)程度残存し、壁溝は窓の周囲をのぞき全ての壁面に認められた。主柱は4本柱で、柱間は東西2.2m・南北1.9mを測る。柱穴は円形を呈し床面には6cm～18cmの厚さで鳥栖ロームを用いた貼床が施される。底面の凹凸が大きいが全体に水平に貼られている。床面の硬化は認められなかった。これを除去すると壁面沿いに住居掘削時の不整形な掘り込みを検出した。西壁の中央部には竈が設けられる(第14図)。竈は八女粘土を用いて貼床底面から構築され、床面から24cm～6cmの高さで残存している。中央・焼成部の壁面には幅84cm・奥行き48cmの突出部が設けられている。西側には半円形の突出部が作りつけられており、煙道と思われる。焼成部中央には壁体と思われる焼土の混入した八女粘土が堆積している。底面には南北72cm・東西51cm・深さ15cmを測るくぼみを検出した。支脚は検出できなかった。



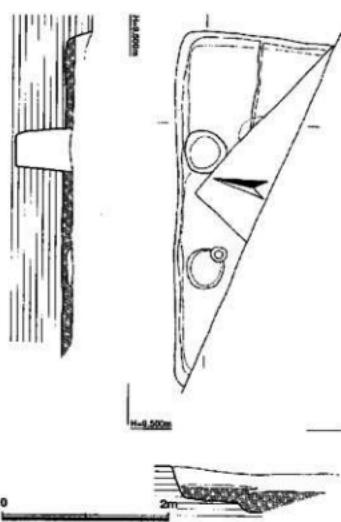
第16図 SC03
実測図 (1/60)

出土遺物 (第15図) 須恵器杯身・杯蓋・高杯・長頸壺・壺、土師器甕・杯・高杯、他に混入として弥生土器が出土している。また特筆すべき遺物としてジョッキ形の須恵器は塊で出土している。

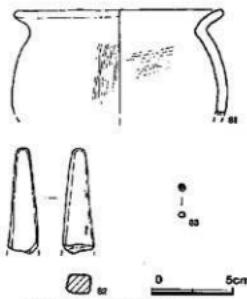
須恵器 (41～58・78)

41～49・51～56・78は杯である。41は蓋で口縁部の小片である。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。内・外面とも回転ナデ調整を施す。42は

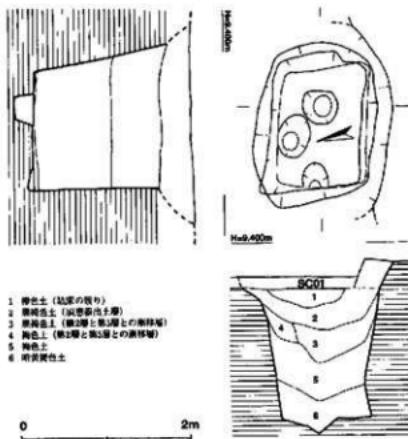
体部から天井部にかけての小片である。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。外面は左回りの回転ヘラ削り・内面は回転ナデ調整を施す。43は蓋で体部から天井部にかけての小片である。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。外面は左回りの回転ヘラ削り・内面は回転ナデ調整を施す。44は蓋で体部から天井部にかけての小片である。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。外面は右回りの回転ヘラ削り・内面は回転ナデ調整を施す。45は蓋で体部から天井部にかけての小片である。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。下端から1.5cmの箇所に凹線が巡り、その直上にわずかな稜が作り出されている。外面は右回りの回転ヘラ削り・内面は回転ナデ調整である。46は蓋で口縁部から体部にかけての小片である。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。口縁内面にわずかに段を作り出す。上端から6mmの箇所にわずかな稜が巡る。内・外面とも回転ナデ調整がほどこされる。47は身の小片である。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。かえりは途中で屈出し上半部はより垂直に近く立ち上がる。内・外面とも回転ナデ調整を施す。48は身の小片である。胎土は精良堅緻で焼成はやや不良である。かえりは薄く垂直に近く立ち上がる。内・外面とも回転ナデ調整を施す。49は身の小片である。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。かえりは低く内傾する。内・外面とも回転ナデ調整を施す。50はいわゆる「ジョッキ形」の塊の口縁～体部にかけての小片である。陶質上器の可能性も考えられるがここでは肯定的に須恵器としておきたい。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。器壁は薄く非常に硬質に焼成されており胎土は黒灰色を呈する。内・外面とも回転ナデ調整を施す。51は蓋である。全体の1/2が残存する。口径は復元で14.6cm・器高は4.3cmを測る。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。口縁は丸く収め内面及び外面下半は回転ナデ調整・天井部は左回りの回転ヘラ削りを施す。52は蓋である。全体の1/4が残存する。口径は復元で15.2cm・器高は残存高4.5cmを測る。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。口縁は丸く収め内面及び外面下半は回転ナデ調整・天井部は左回りの回転ヘラ削りを施す。53は蓋である。口径は復元で13.9cm・器高は残存高2.3cmを測る。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。口縁はわずかに外反させ内・外面は回転ナデ調整を施す。54は身である。全体の1/4が残存する。口径は復元で11.2cm・器高は5.0cmを測る。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。かえりは内傾し上半が垂直に近く立ち上がる。内面及び外面上半は回転ナデ調整・外底面は左回りの回転ヘラ削りを施す。55は身である。口径は復元で12.4cmを測る。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。受け部に鋭角的なナデ付けが認められる。内・外面とも回転ナデ調整を施す。56は身である。底径は復元で13.4cmを測る。胎土は精良堅緻で



第17図 SC04実測図 (1/60)



第18図 SC04出土遺物
実測図 (1/3)

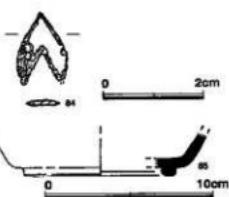


第19図 SE01実測図 (1/60)

焼成は良好である。高台は垂直に立ち上がり内・外面とも回転ナデ調整を施す。掘立柱建物に切られている部分からの出土であり混入と考えられる。57は壺である。床面直上より出土した。胸部最大径17.6cmを測る。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。頸部及び胴部上半は格子目のタタキをナデ消したのち横方向のハケ・胴部下半には格子目のタタキを残している。内面には全体に同心円状の当て具痕が残る。58は壺である。床面直上より出土した。胴部最大径は10.0cmを測る。頸部上半より上を欠損する。頸部下半には波状文を施す。胴部中央付近に径1.8cmの孔を外側より穿孔し、刻み目を全周させる。胴部下半には左回りの回転ヘラ削りを施す。

土師器 (60~68)

60・61は二重口縁壺の小片である。胎土は精良で焼成は良好である。61は口縁部の小片である。端部を欠損する。62は壺である。口縁部の小片で著しく磨滅している。胎土は精良で焼成は良好である。端部は丸く收める。63は壺である。胎土は精良で焼成は良好である。口縁部から体部にかけての小片で体部には縦方向のハケを施す。64は壺である。口径は復元で10.8cmを測る。胎土は精良を測る。胎土は精良で焼成は良好である。口縁端部は丸く收め体部には縦方向のハケを施す。65は壺である。口径は14.6cmを測る。胎土は精良で焼成は良好である。口縁端部は丸く收め体部外面には斜め方向のハケを施す。66は壺である。底部を欠損する。口径は復元で11.6cmを測る。胎土は精良で焼成は良好である。口縁端部は丸く收め頸部に細かい横方向のハケ、体部に縦方向のハケを施す。67は壺である。口径は復元で10.8cm・器高は12.2cmを測る。胎土は精良で焼成は良好である。口縁端部は丸く收める。外面調整は崩壊の磨滅が著しいため不明である。68は小型の壺である。最大径は復元で9.0cmを測る。胎土は1mm程度の砂粒を非常に多く含むが焼成は良好である。全体に著しく磨滅しているため調整は不明である。

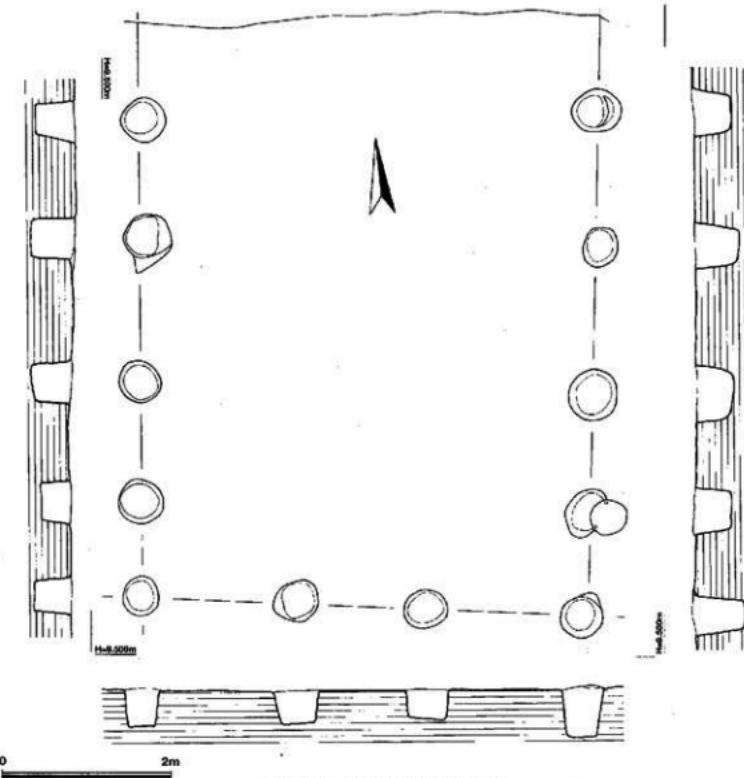


第20図 SE01出土遺物
実測図 (1/1 - 1/3)

め方向のハケを施す。体部内面にはユビオサエの痕が残る。66は壺である。底部を欠損する。口径は復元で11.6cmを測る。胎土は精良で焼成は良好である。口縁端部は丸く收め頸部に細かい横方向のハケ、体部に縦方向のハケを施す。67は壺である。口径は復元で10.8cm・器高は12.2cmを測る。胎土は精良で焼成は良好である。口縁端部は丸く收める。外面調整は崩壊の磨滅が著しいため不明である。68は小型の壺である。最大径は復元で9.0cmを測る。胎土は1mm程度の砂粒を非常に多く含むが焼成は良好である。全体に著しく磨滅しているため調整は不明である。

弥生土器 (69~75)

69は壺口縁部の小片である。端部は内・外両面に肥厚する。胎土は精良で焼成は良好である。内・外両面ともナデ調整を施す。70は高環脚部の小片である。身部との接合部にあたる。胎土は精良で焼成は良好である。内・外両面ともナデ調整を施す。71は高環の小片である。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。内・外両面に赤彩を施す。72は壺底部の小片である。胎土は精良で焼成は良好である。73は壺底部の小片である。胎土は精良で焼成は良好である。全体に著しく磨滅し調整は不明である。74は壺の底部である。底径は復元で6.7cmを測る。外面には縦方向のハケを施す。胎土は精良で焼成は堅緻である。75は壺の底部である。底径は復元で8.3cmを測る。外面には縦方向

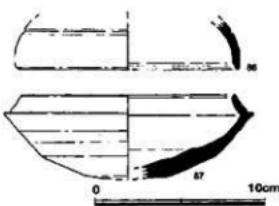


第21図 SB01実測図 (1/60)

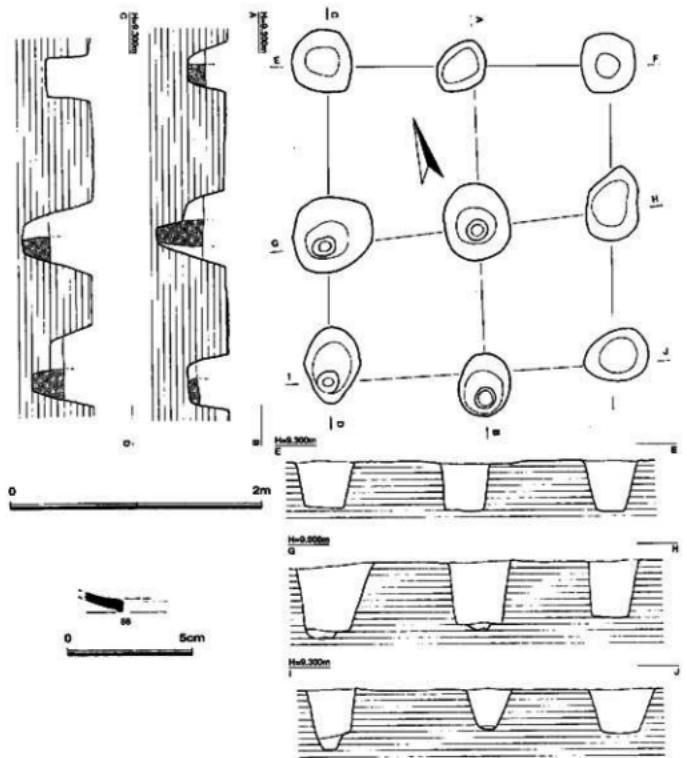
のハケを施す。胎土は精良で焼成は堅緻である。

その他の遺物 (59・76・77・79・80)

59は炉壁である。底部の破片で底面に粘土及び直径1mm程度の砂粒が付着する。全体に気泡が観察できる。土師質の土器片が付着する。76は不明土製品である。上師質でわずかに円弧をなしておりもとは大きな環状を呈していたものと思われる。外面はナデ調整・内面はユビオサエの痕が残る。上面・下面は未調整である。胎土は精良で焼成は良好である。77は瓦器挽口縁部の小片である。口縁は若干外反した後垂直に立ち上がる。胎土は精良であるが焼成はやや不良である。外面のみ焼しが残存する。内・外両面とも回転ナデ調整を施す。79は砥石である。砂岩製で研ぎ面は1面のみ残存する。上下方向の擦痕が観察できる。80は紡錘車である。滑石製で直径は復元で4.7cmを測る。上面外側は面取りを施す。中央には孔を斜めに穿孔する。



第22図 SB01出土須恵器
実測図 (1/3)



第23図 SB02・出土須恵器実測図 (1/40・1/3)

を用いた貼床が施される。遺物の出土は認められなかった。

SC03
(第16図)
調査区東端にて検出した。全体の大半が調査区外となり調査できなかつた。住居内から柱穴を1基検出したが主柱穴であるかどうかは不明である。主軸をN-64°-Wにとる。壁は12cm程度残存し、壁溝は認められなかつた。床面には6cm程度の厚さで鳥栖ローム

SC04 (第17図)

調査区南端にて検出した。南側2/3程度が調査区外となり調査できなかつた。住居内から柱穴3基を検出したが、位置が近接しており主柱穴とは断定できない。主軸をN-11°-Eにとる。壁は10cm程度残存し、壁溝は認められないが北壁沿いにベッド状遺構を幅90cm・高さ5cm程度設けている。床面には5cm程度の厚さで鳥栖ロームを用いた貼床が施される。

出土遺物 (第18図)

土師器 (81)

81は無頸壺である。口径は復元で12.2cmを測る。体部外面にはタテハケ・内面には横方向のハケを施す。

その他の遺物 (82・83)

82は磁石である。砂岩製で4面に研ぎ面が残存する。断面はほぼ方形である。83はガラス製の小玉である。外径は4mm・内径は2~1.5mmを測る。色調は透明感ある淡青色で内部に若干の気泡が認められる。

井戸 (SE)

1基検出している。底面のプランが方形で八女粘土には達していないが、ここでは暫定的に井戸としておく。

SE01 (第19図)

調査区西半で検出した。北半をSC01に切られる。堀形は不整な梢円形で底面のプランは東西1.2m・南北0.9mの長方形を呈する。深さは1.8mを測る。埋土は上半が黒褐色粘質土・下半が暗黄褐色砂質土である。層位は漸移的で自然堆積と思われる。底面にピット状のくぼみが認められるが埋土はその上のものと同じである。出土遺物は後述の2点のみであり時期は確定できない。

出土遺物 (第20図)

全て上層の黒褐色土層より出土した。84は黒曜石製の剥片鏃である。打製で刃部は両面から調整している。右側の逆刺部先端を欠損する。全長1.4cm・幅1.0cmを測る。85は須恵器杯身である。底径は復元で8.8cmを測る。内・外両面とも回転ナデ調整を施す。SC01に切られる部分からの出土であり混入と思われる。

掘立柱建物 (SB)

2棟検出している。SB01・02とも主軸をそろえており、きわめて近い時期に存在していた可能性が高いが、重複しており併存していたとは考えられない。いずれにせよ互いに何らかの関連を持った遺構と思われる。

SB01 (第21図)

調査区東半で検出した。SC02を切る。東西3間・南北は5間以上の掘立柱建物で、北面の柱穴は調査区外となり検出できなかった。規模は東西長約5.3m・南北長7.2m以上を測る。長軸をほぼ南北に合わせ、柱間は心々で1.2~1.9mを測る。各柱穴からは土師器・須恵器の小片が出土している。

出土遺物 (第22図)

86は杯蓋である。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。口縁部内面に段を作り出し体部外面に一条の凹線を巡らす。内・外両面とも回転ナデ調整を施す。87は杯身である。口径は復元で12.2cmを測る。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。かえりは内傾し受け部に明瞭なくぼみを巡らす。内面及び外面上半は回転ナデ調整・外面下半は左回りの回転ヘラ削りを施す。

SB02 (第23図)

調査区東半で検出した。SC02を切る。2間×2間の総柱建物である。南北軸はSB01にほぼ合致する。建物規模は南北長約3.8m・東西長約3.6mの平面正方形を呈する。柱穴堀形は不整円形で直径50~60cmを測り柱間は心々で約1.2mを測る。各柱穴からは土師器・須恵器の小片が出土している。

出土遺物 (第23図)

88は杯蓋である。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。口縁部は直立し端部を丸く收める。内・外両面とも回転ナデ調整を施す。

III 小結

各遺構・遺物については以上の通りであるが、最後に簡単に概要を整理し、まとめに代えたい。

本調査区は台地の端部に所在するため削平が少なく、遺構の残存状態も良好であった。遺構は大半が古墳時代後期の所産である。ただし調査区北端にて検出したSC04からは土師器無頭壺が出土しており、ベッド状遺構を有することから、古墳時代中期に位置づけられる。このことより、当該期には調査区周辺にまで開発が及んでいたことが想定される。SC01・02からはTK209並行期の須恵器が

出土しており、周辺の集落が一時断絶していたものと思われる。また、住居の主柱穴を検出する際、貼床上では柱痕のみしか検出できず、貼床除去後ようやく柱穴を検出できた。柱穴は貼床の上からでは検出できず、柱を据え付けた後に床を貼った可能性がある。竪穴住居廃絶後、住居跡を切り込んで掘立柱建物が建てられる。建物自体2棟が切り合っており、先後関係があるが方位をそろえており互いに何らかの関係のある建物と思われる。柱穴からの遺物は小片が多くSC02を切っているため混入も多いと思われるが、SB02出土須恵器杯蓋から8世紀以降の所産と思われる。これ以降、本調査区内ではまとまった遺構は見られない。中世前半と思われるピットが住居を切って埋り込まれているが、掘立柱建物になるものではなく、この時期の様相は不明である。中世後半以降の遺構は見られず、畠地となって現在に至っていると思われる。

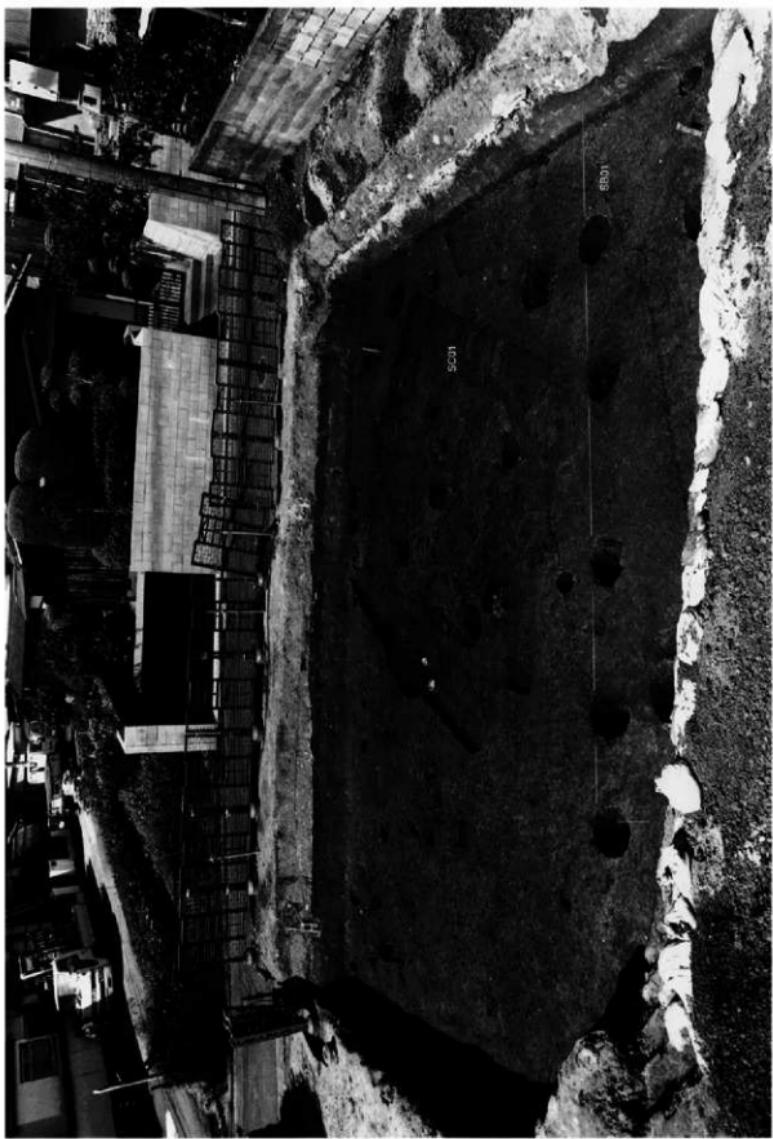


写真 1 調査区西半全景（東から）



写真2 調査区東半全景（西から）



写真3 SC01（南から）



写真4 SC01竪（南から）



写真5 SC02（東から）



写真6 SC02窪（東から）



写真7 SC02西側遺物出土状況（東から）

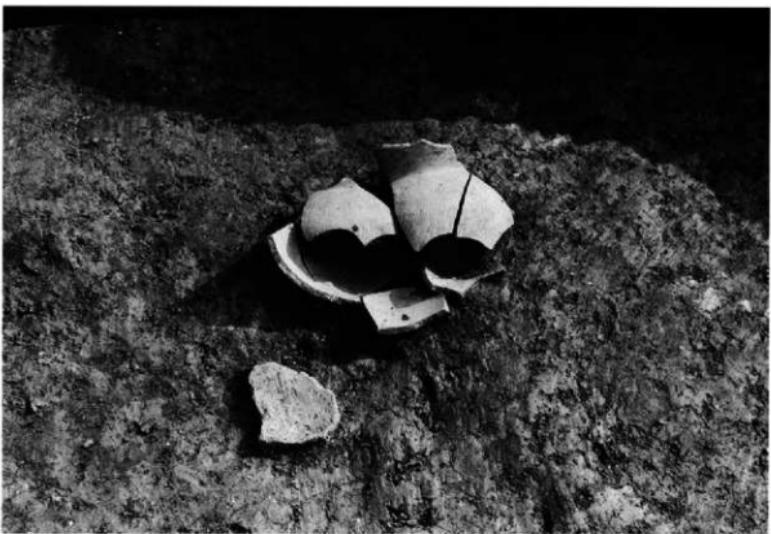


写真8 SC02南側遺物出土状況（北から）

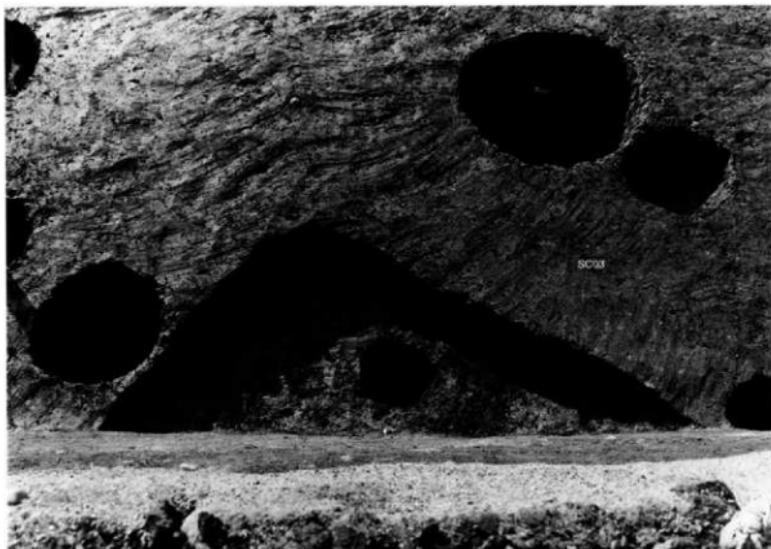


写真9 SC03 (東から)



写真10 SC04 (南から)



写真11 SE01（南から）



写真12 SB01西側柱穴列（南から）

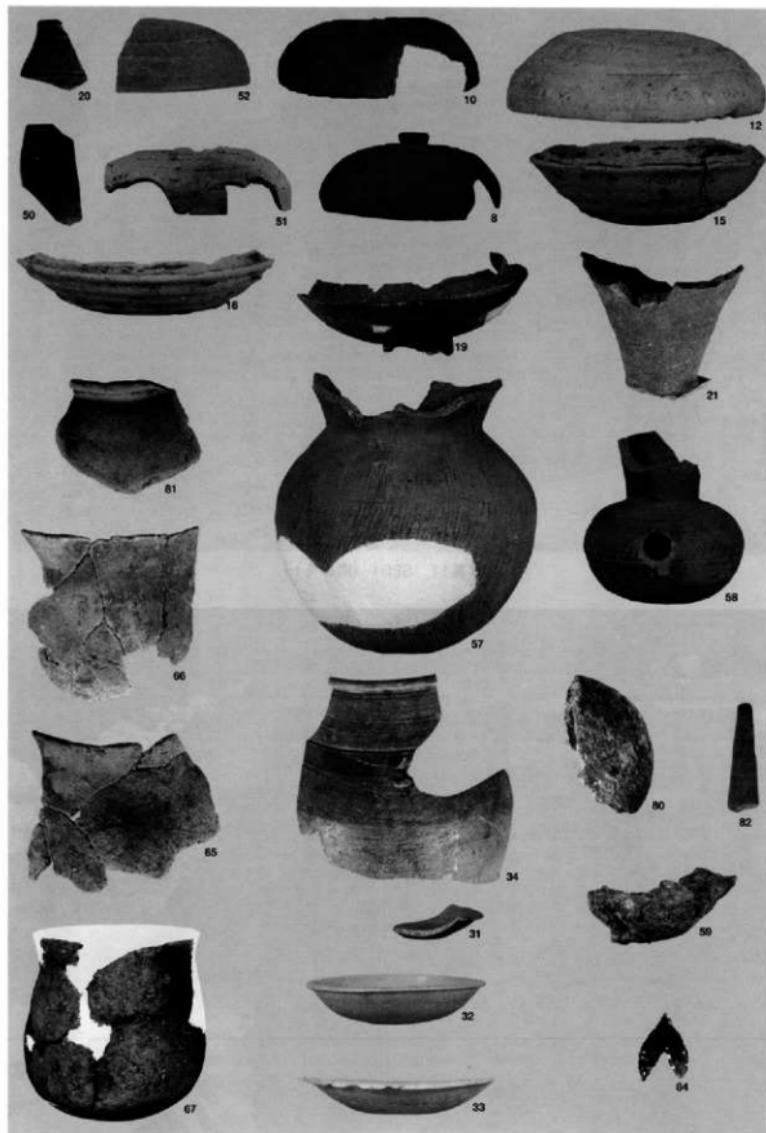


写真13 出土遺物 (1/3、80・84のみ実寸)

三筑遺跡 第4次調査報告

I はじめに

1. 調査に至る経過

平成11年6月23日付けで、藤善行氏より本市教育委員会宛に博多区三筑2丁目19-5（面積：344m²）における駐車場建設に伴う埋蔵文化財事前審査願が提出された。（事前審査番号：11-2-219）。これを受けて教育委員会埋蔵文化財課では申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群に含まれていることから事前調査が必要であると判断し、同年7月2日に試掘調査を行った。その結果、良好な遺構が検出され、この試掘調査結果をもとに両者で協議を行ったところ、基礎工事に伴う地盤改良により遺構の破壊を免れないため、盛土部分を対象に本調査を実施することとした。その後、委託契約を締結し、同年9月3日より発掘調査を行うこととした。

なお、発掘調査において藤善行様をはじめ関係者のみなさまには多大なご協力とご理解をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

2. 調査体制

事業主体 藤善行

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 山崎純男 同課調査第2係長 力武卓治

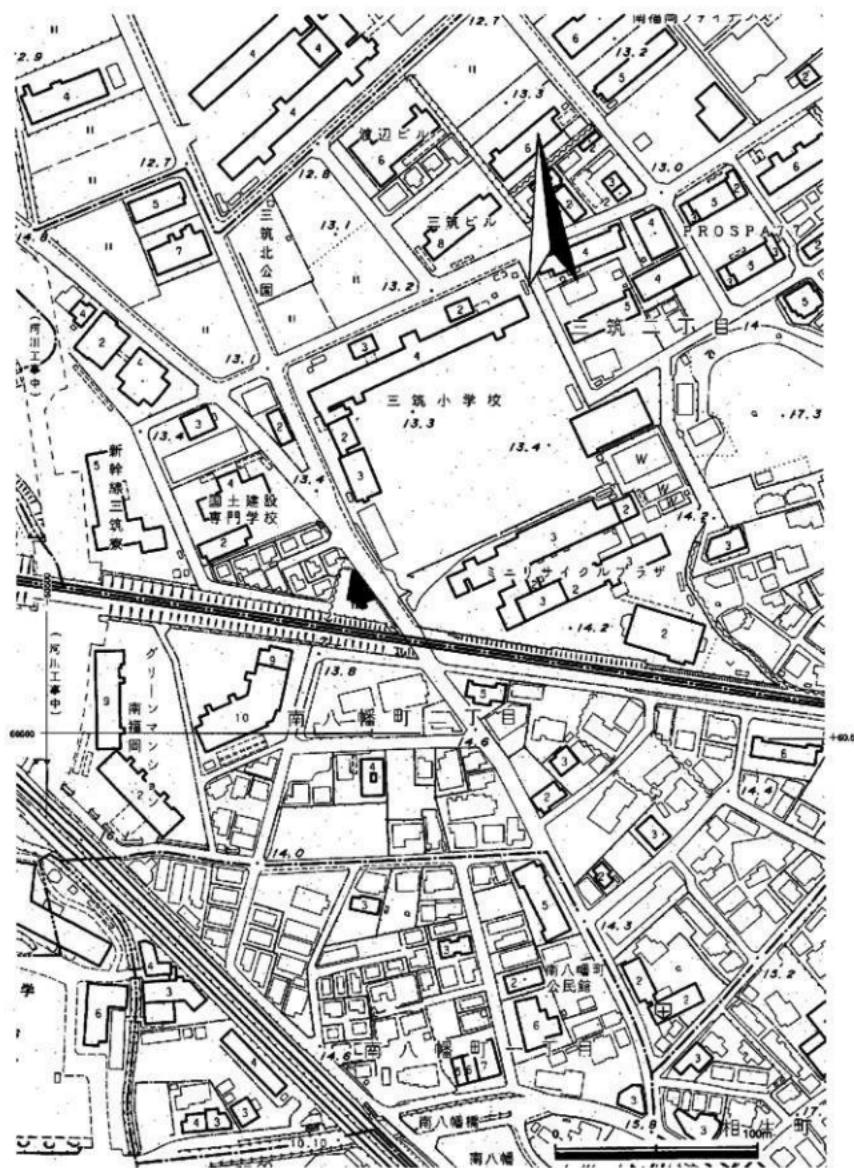
調査庶務 文化財整備課 谷口真由美（前任） 御手洗清（現任）

事前審査 埋蔵文化財課事前審査係長 出中壽夫 同課事前審査係文化財主事 加藤隆也

調査担当 同課調査第2係 梶本義嗣 同課調査第1係 阿部泰之

整理作業 稲田慧 黒早苗

調査作業 金子誠雄 金子澄子 熊本義徳 小林義徳 坂田武 関哲也 米倉國弘 石橋テル子 酒井康恵 杉村百合子 辻美佐江



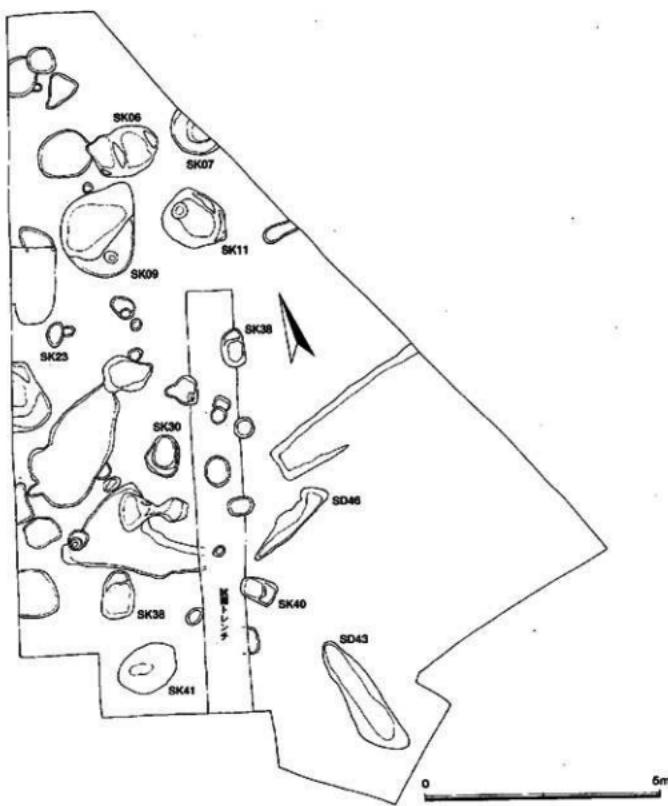
第1図 調査区位置図 (1/2,500)

II 位置と環境

三筑遺跡は須玖丘陵の北側、丘陵に開拓された谷に形成された沖積地に立地する。今次調査区の東約1kmには御笠川が、西には諸岡川が北流している。三筑遺跡の周辺には西に篠原遺跡が隣接し、南に南八幡遺跡が位置する。東の丘陵上には麦野遺跡群が位置し、篠原遺跡の西には日佐遺跡が位置する。以下、周辺の各遺跡について概観したい。

篠原遺跡は三筑遺跡同様、谷に形成された沖積地に立地し、第1次調査において7世紀中葉～後半の上坑群が検出されている。今次調査でも類似した土坑が検出されており注目される。第3次調査では中世以降の水出及び旧諸岡川の流路が検出されている。遺物は流路から土師器小皿が出上している。南八幡遺跡は三筑遺跡の南に広がる丘陵上に位置する。現在に至るまで8次の調査が行われ、古墳時代後半～奈良時代にかけての集落跡が検出されている。麦野遺跡群は南八幡遺跡と連続する丘陵上に立地する。複数の丘陵に分散して遺跡が分布し、奈良時代・中世～近世に至る集落が検出されている。日佐遺跡は三筑遺跡同様、沖積地に形成された遺跡である。現在に至るまで3次の調査が行われ、それぞれ中世前半の集落跡が検出されている。

三筑遺跡はこれらの遺跡に囲まれた沖積地に営まれ、中世期に微高地に集落が形成される以前は篠原地区同様低湿地であったと推定される。現在に至るまで4次の調査が行われている。第1次調査は三筑小学校の改築工事に伴って行われ、古墳時代後期の流路と水田の区画が検出されており水路・井堰・水田の三者における水利関係が明らかになった。流路は調査区内を蛇行して北流しており、幅4～6m・深さ1～1.5mを測る。これには井堰が設けられており、調査区内では6カ所確認されている。井堰にはそれぞれ時期差があり、弥生時代～5世紀代にわたっている。水田区画は14面検出されており、1区画の面積は100～160m²を測る。これらの水田には3m×3m～4m×5mの水溜状のくぼみが付属しており、オキスの可能性が指摘されている。出土遺物は流路からのものが多く、井堰の一つからは供獻祭祀に伴うものと思われる土師器壺類が完形で出土しているほか、井堰下流からは井堰設置当時のものと思われる石包丁が出土している。第1次調査ではまた、流路廃絶以降に中世の水田が形成されていることが確認された。第2次調査では、近世の溝1条と土坑・ビット群が検出されている。これらの土坑は堀形・断面とともに不定型であり今次調査で検出した土坑と類似している。平成11年に行われた第3次調査では、近世の水田に伴う遺構が検出されているほか、旧河川の落ち込みが検出されているが、全体に遺構は少なく調査区周辺は近世以降の開発と思われる。今回報告する第4次調査では、土坑・溝状遺構・ビット群を検出した。土坑・溝状遺構は堀形が不整形なものが多く遺物を全く伴わないものが大半であるが、土坑SK06から須恵器横瓶が出上している。その他、風倒木痕から土師器細片が1点・遺構検出面から若干の陶磁器細片が出上している。

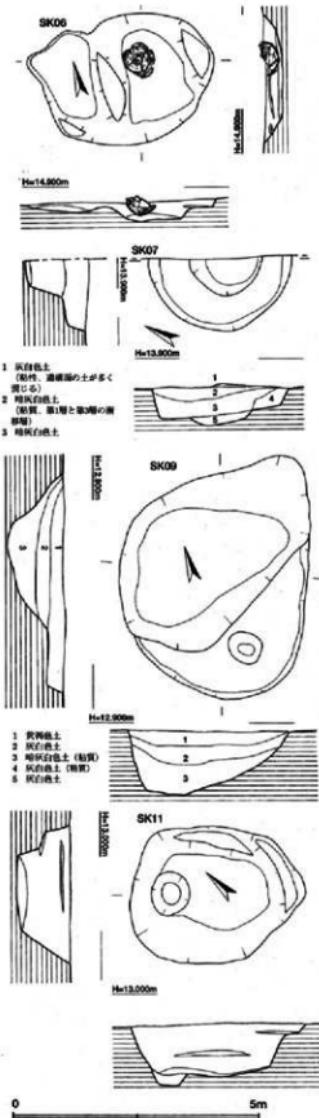


第2図 調査区全体図 (1/100)

III 調査の記録

1 調査概要

本調査区は1978年に実施された第1次調査区の南約200mに位置する。検出した遺構は上坑・ピット群・溝状遺構で、遺構は標高約13mの水田耕作土の30cm下、黄白色粘質土上にて検出される。位置と環境でも述べたとおり、検出した遺構は堀形が不整形で遺物を伴わないものが大半である。土坑内から須恵器横瓶が出土した以外は、検出面から陶磁器細片数点が出土したのみである。遺構は調査全体に分布するが、南側は水田開墾による削平を受けており、遺構は確認できなかった。調査区内の基本的な層序は、表土直下に床土があり、その下に暗黄色土層が存在する。これには上面に耕作によるものと思われる浅い溝状の掘りこみが認められる。この下層が遺構検出面である。



第3図 SK06・09・11実測図 (1/40)

2 遺構と遺物

土坑 (SK)

8基検出している。SK06から須恵器横瓶が出土している以外には遺物の出土は認められなかった。多くの土坑は輪形・断面形状ともに不整形である。埋土は粗砂混じりの青灰色粘土・粗砂混じりの黄褐色～青灰色粘土の2種があり、切り合い関係から前者の方が古いと考えられる。

SK06 (第3図) 平面形は長軸を東西にもつ不整な梢円形を呈し東西3.8m・南北2.8mを測る。底面は不整形で中央西よりにテラス状の高まりがある。底面より4cm程度浮いた状態で須恵器横瓶が出土した。

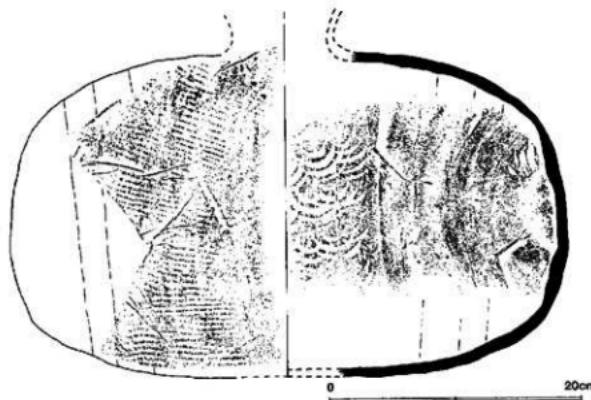
出土遺物 (第4図) 1は須恵器横瓶である。胴部最大径は25.5cmを測る。胎土は精良堅緻で焼成は良好である。胴部内面は同心円状の當て具痕があり3本の界線が巡る。外面は格子目状の叩き目が残る。胴部端は直径6cm程度の円盤状の粘土を外面より貼り付けて成形し、外面から接合痕をナメ消している。

SK07 (第3図) 調査区東端にて検出した。平面形は略円形と思われる。南北3.0m・深さ25cmを測り底面を2段に掘り下げる。遺物は出土しなかった。

SK09 (第3図) 平面形は不整な梢円形を呈する。南北2.0m・東西1.6m・深さ44cmを測る。底面は全体に不整形でレベルも一様でなく凹凸が激しい。埋土の堆積は漸移的で地山の土が多く混じる。遺物は出土しなか



写真1 SK06出土横瓶

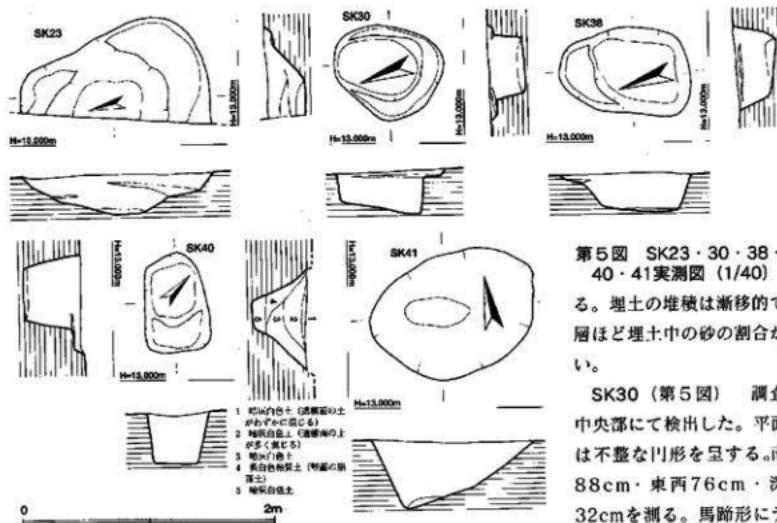


第4図 SK06出土横瓶実測図 (1/4)

った。

SK11 (第3図) 平面形は不整な方形を呈する。長軸長1.5m・短軸長1.1m・深さ44cmを測る。内部には2カ所のテラスを設け底面にピットを有する。切り合いは確認できなかった。

SK23 (第5図) 調査区西端にて検出した。平面形は不整な方形と思われる。南北長1.6m・深さ32cmを測る。南北2方向にテラスを設け

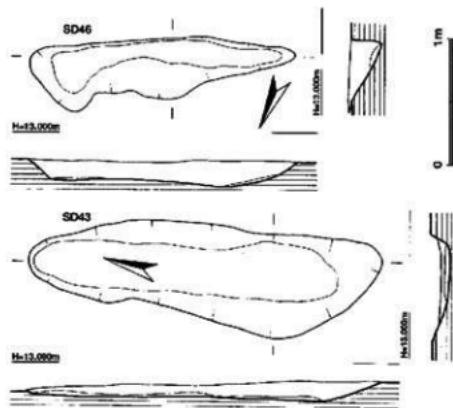


第5図 SK23・30・38・40・41実測図 (1/40)
る。埋土の堆積は漸移的で下層ほど埋土中の砂の割合が低い。

SK30 (第5図) 調査区中央部にて検出した。平面形は不整な円形を呈する。南北88cm・東西76cm・深さ32cmを測る。馬蹄形にテラスを有する。埋土は粗砂混じりの黄褐色～青灰色粘土である。

SK38 (第5図) 調査区北半にて検出した。平面形は不整な楕円形を呈する。南北1.04m・東西68cm・深さ32cmを測る。北側にテラスを有する。埋土は粗砂混じりの暗灰色粘土で下層ほど粘質が強い。遺物は出土しなかった。

SK40 (第5図) 調査区北半にて検出した。平面形は不整な方形を呈する。長軸長80cm・短軸長48cm・深さ44cmを測る。埋土は粗砂混じりの黄褐色～暗灰色粘土で下層ほど粘質が強い。遺物は出土しなかった。



第6図 SD43・46実測図(1/40)

2.8m・東西84cmを測る。削平が著しく深さは4cm程度である。
ある。

SD46(第6図) 調査区中央部にて検出した。北側の扁形が不整で浅く「片栗研磨」状の断面を呈す。埋土は灰白色粘質土で下層は暗灰色となる。

その他の遺構調査区中央西側で不整形なプランを2カ所検出したが、底面の凹凸が激しく不整形なため風倒木と判断した。

IV 小結

本調査では8基の土坑と2条の溝・ピットを検出したが、出土遺物がほとんどなく時期が明確なものは7世紀末～8世紀初頭と思われる須恵器横瓶が出土したSK06のみである。また風倒木痕から土師器片が1点出土したが細片のため器種・時期の判別はできなかった。不整形な土坑に少数の遺物を伴うような遺構は佐原遺跡・南八幡遺跡等で墳墓とされる類例が報告されており、本調査区で検出した土坑も墳墓である可能性が指摘される。本調査検出の土坑は佐原遺跡の土坑に比して小規模であり、屈葬の形式がとられたと思われる。今回の調査では律令期前半における低湿地遺跡の様相の一端を明らかにできたといえよう。

SK41(第5図) 調査区北端部にて検出した。平面形は不整な梢円形を呈する。南北1m・東西1.3m・深さ52cmを測る。本遺構周辺は地山中に粗砂ブロックが多く含まれ地山の認識が困難であった。埋土は粗砂混じりの青灰色粘土である。

溝(SD) 2条検出している。連続的に伸びるものではなく長さ3m未溝の掘り込みとして認識できるにすぎない。長軸を互いに直交する方向にもち何らかの関係を持っていた可能性もあるが出土遺物もなく詳細は不明である。

SD43(第6図) 調査区北半にて検出した。長軸を南北にもつ。南北

2.8m・東西84cmを測る。削平が著しく深さは4cm程度である。

IV 小結



写真2 調査区全景（東から）



写真3 SK06遺物出土状況（南から）



写真4 SK06元盤状況（南から）



写真5 SK07（東から）



写真6 SK30（西から）



写真9 SK41土層断面（西から）



写真7 SK38（西から）

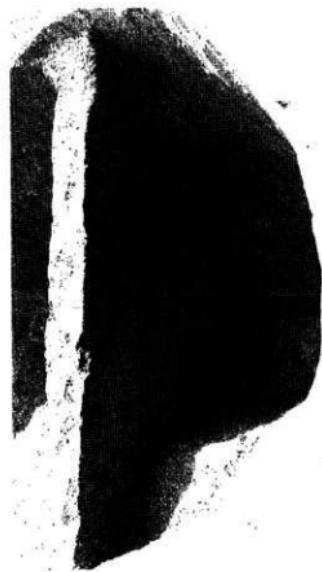


写真10 SK40（西から）

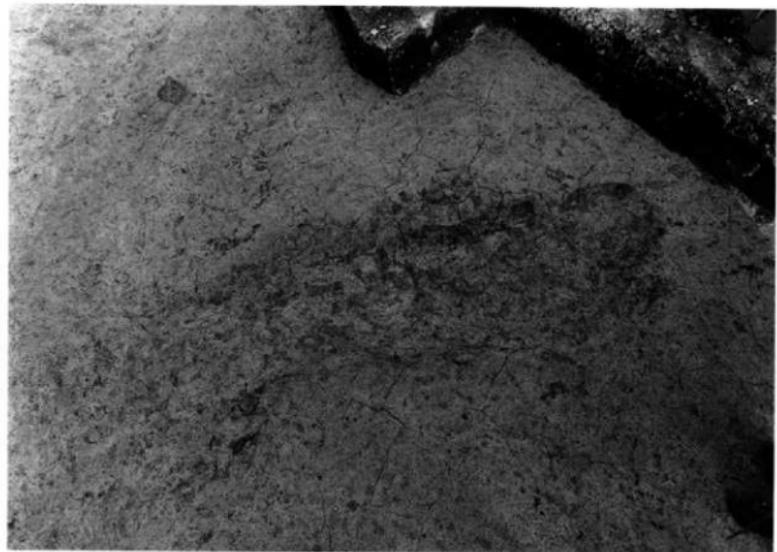


写真11 SD43（南から）



写真12 SD46（南から）

那珂 29

—那珂遺跡群第72次・三筑遺跡第4次調査報告—
2001年（平成13年）3月30日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 新交社印刷
福岡市中央区地行1丁目11番3号
